第一章

序論

A. 研究の背景

インドネシア人の学習者 にとって、日本語は第二か第三の言語である。 筆者もその中にある人の学習者である。日本語は母語話者に比べると、いくつの相違点があるので、日本語を学ぶとき多くの問題が出てくると思うわれる。学習者は全体日本語の特徴を理解するために、そのような相違点を解決しなければならない。

学習者は日本語をあまり理解しないと、コミュニケソンで誤解する、またはミス・コミュニケーションが行うと思われる。その原因は日本語が遠回し カテゴリの中にある言語である。日本語では話し手が自分の言う目的を伝えるとき、あまりはきりしない、または明らかで言わないと思われる。日本人は話の意図があまりはきりで言わない。話し手の頭の中にはきりしないで言った事が多く理由がある。ゆえに日本語の学習者にとってそのようなことは難しいことである。

「ちょっと」はいろいろな発話によく出て来た。違う発話で使用すると、「ちょっと」はまた違う意味が持っている。「ちょっと」は一般的に日本人の会話で使用している。会話で表明を曖昧にすると

「ちょっと」をよく言っている。「ちょっと」が曖昧な言葉は学習者にとって難しいこと思われる。このようなことは Haribun (2006) の意見と同じである。Haribun (2006) は日本語の曖昧言葉を学ぶためにデータベースを作った。そのデータベースは特別、中国の学習者にとって、日本語で難しい曖昧言葉を解決するために作られた。その調査は 98 人の応答が参加した。応答する人にとって困惑させる言葉を表に入れる。結果は「ちょっと」がその言語の表に入れる言葉である。

「ちょっと」が難しい表現の意見は論文でも書いてある。その論文は Saleh が書かれる。タイトルは「機能と意味的で『ちょっと』と『すみません』の表現が使用される学習者の能力を分析する」。その研究は 2003/2004 年の UNIKOM の三年生の日本語の学生に行っている。研究は筆記試験で行こなっている、答えが全部正しいならば、100 点を得る。結果は学生の「すみません」を使用されるの能力は一般標準で 63 点を得る。「ちょっと」を使用されるの能力は一般標準で 33 点を得る。

Narande (2006) によると「今日はちょっと」の文の中にある「ちょっと」は断りの答えになると書いてある。Narande にとって「ちょっと」で断りをするのは相手に困るになると思われる。またその表現は適当な答えにならない。したげって、断り表現の授業で教えるのはあまりあわないかもしれないと述べてる。

この「ちょっと」の機能と意味をあまり理解しないと、感情を害するのが起こしやすい心配がある。また　その「ちょっと」を間違いで使われるのがたまにある。この筆者の経験と同じように「ちょっと」が使われるとき曖昧になった。クラスで授業が終わる前に日本人の先生が「みなさん、ちょっとやって見て下さい」と言っている。次の授業で先生は先週の宿題を学生たちに聞いている。学生にいるクラスで　２、３人しか　その宿題をやっている。ほかのは「宿題があるか。知らなかった」と言っている。先週、先生が言った「ちょっとやって見て」のはまじめでやらないと同じ意味を学生たちに思われる。そのじけんをきっかけに学生たちは会話で使う「ちょっと」を理解するのが必要なことと思われる。この（ちょっとやって見て下さい）の文にある「ちょっと」は「ただやって見て」、「深刻でやらない」の意味が持っているではなく、みんなにその宿題を「まじめでやってください」の意味を持っている。「ちょっと」の表現は日常の会話によく使う。インドネシアで「ちょっと」について考察が乏しいので、学習者がよく理解するのがあまりできない。筆者にとって「ちょっと」は発話で　ただ副詞になるだけではなく、非常に会話で使用される丁寧さに関してがあると思われる。それで発話で使用される「ちょっと」を研究するのは必要と思うわれる。

上に述べてる理由に基づいて、筆者は発話にある「ちょっと」を研究する。本研究は語用論の接近で研究する。

B. 本研究の問題と問題範囲

本研究の問題は以下のようである。

1. 日本語で「ちょっと」を使用する発話はどのような発語内行為の機能を持っているか。
2. 日本語の発話で「ちょっと」を使用するのはどのような原則を現れるか。
3. 日本語の発話で「ちょっと」を使用するのはどのような丁寧さの程度を現れるか。

C. 本研究の目的と意義

本研究の目的は以下である。

1. 「ちょっと」を使用する発話で発語内行為機能を知るため。
2. 「ちょっと」を使用するの発話で現れる原則を知るため。
3. 「ちょっと」を使用するの発話で現れる丁寧さの程度を知るため。

本研究の意義は学習者の知識を広がるために、参考文献、特に「ちょっと」の機能の情報を与える。また学習者に「ちょっと」の意味を説明する時に、先生たちに代案の接近を勧め、学習者の誤解を減らす。それ以外、本研究を行うと、次のもっとも深い研究の資料に意義になるの望みがある。

D. 研究の方法

1. 研究の方法

本研究は記述分析を用いる。記述分析はそのまま得るデータに基づいて　データを分析する方法である　(Sevilla、Harahab に 2008)。使用する記述方法は体系化で、正確で、実際で　データの様子、現象的説明を与えできる。最後で科学的のデータ・イラストレーションの結果が説明できる　(Djayasudarma 1993、p・8)。

記述分析を使用すると、本研究は日本語の発話でその言葉が用いて、日本に増え、存在していて、具体的で使用される。そこから元の言語を用いる限り説明できる。

2. データ収集方法

本研究のデータ収集は日本語の発話で「ちょっと」の使用するのを観察し、使用する複数形　を書いて方法を用いる。

データ収集は筆記するテクニックとよく聞いて 筆記するテクニックである。めだかの学校 1-3 の漫画、おしゃべりな時間割１－２の漫画, 月間雑誌・修羅の刻、教科書『みんなの日本語１』、『みんなの日本語 II』，『始めよう日本語初級 1』,『始めよう日本語初級 II』，「*Livin Japanese*」，『日本語中級 1』から取られたデータは筆記テクニックで収集している。序段じゃない　の映画，太陽と海の教室の映画，最後の約束のドラマ、ちび丸木ちゃんのドラマ、

どらえもんのアニメ、My Girl のドラマから取ったデータはよく聞いて筆記テクニックで収集している。

3. データ分析の方法

本研究でデータ分析方法が使用するのは確認テクニックである。

データを収集し、本研究で使用する理論に基いてデータを分析してる。第一の問題はコンテックスで「ちょっと」を使用する発話の発語内行為の機能を分析してる。 第二の問題は「ちょっと」を使用する発話の原則を得るために、Leech の　ポライトネス原則で分析してる。第三の問題は日本語の発話で「ちょっと」を使用するの丁寧さの程度を得るために、Leech の　丁寧さの程度に基づいて分析してる。

E. 本論の構成

本論は次のような構成から成り立っている。

まず、第一章は序論である。

序論で筆者は問題の背景、研究の問題設定及び範囲、研究の目的と意義、研究の方法を説明する。 研究の背景を説明するのは研究の起点である。背景は日本語を学ぶとき含まれる問題である。その問題は研究者と一般的に日本語学習者の経験からを得ること。

研究者にとって、その問題は個人的な問題が、ほかの学習者の問題は、先行研究から読んでいる。 次、含んでいる問題を設定い、本研究の目的と研究の意義を記述している。また 本研究を作成するために、研究構成に基づいて、系統的な書きかたのデザインを与える。

第二章　基礎的理論

本章でまず「ちょっと」に関して専門化と先行研究から取った文献を説明する。次は語用論のデフィニション、発話行為と発話行為の種類、コンテックスと発話のシチュエション、ポライトネース理論とポライトネース原則、丁寧さの程度を説明する。この第二章にある理論は本研究を支持する理論である。 先行研究と専門家の理論を述べると、ある科学で本研究の地位を記述するのが出来る。専門家達の理論、特に　Leech の理論を基づいて、獲得データを分析する。

第三章　研究の方法

研究の方法には研究のアプロッチ、データとデータの出所、データ収集方法、データ分析方法、結果を解説方法がある。

研究方法には本研究がいかなる過程を行うか、何でデータを分析のか、研究結果はどんな解説することを述べる。上で述べることから、本研究の大切なことを記述する。

第四章　データ分析

データ分析は研究の質問を答えることである。第四章で筆者はデータを分析する。「ちょっと」を使用する発話の分析結果を現れる。まず、Brown と Leech　のコンテックス理論に基づいて、「ちょっと」を使用する発話の発話内行為機能を分析し、結果を現れる。次、Leech のポライトネス原則の理論に基づいて、「ちょっと」を使用する発話の原則を現れる。 Leech の丁寧さの程度理論に基づいて、日本語の会話で「ちょっと」を使用されるの丁寧さ程度を現れる。

第五章　結論と今後課題。

大体「ちょっと」の意図は第五章で現れ、結論である。 結論は本研究の決勝結果である。 次は第五章は今後課題がある。今後課題では本研究の問題に関して提案する。その問題は継続の研究になて、それで研究するのは必要なことと考えられる。 継続の研究は「ちょっと」に関しての研究と思われる。